アル死して名無し生まれる

「だから行ってるだろ。俺には考えがあるって。もう身分証はいらねーんだよ」

「身分証を破くやつがあるか！そんな暴挙に出るくらいなら奴隷で這い上がる方法を冷静に模索すればいい！お前なら翻訳家としても重用されるだろ！？」

「はっ、翻訳家ってのは商会の雇われ、金持ちの、貴族の駒だ。俺は連中を駒にして使いたいんだよ！」

「しかし身分証は！？」

アルとカイルのちょっとした口論が火花をちらしていた。ファヴェーラは我関せずの姿勢を貫く。

「だから言ったろ、奴隷じゃ無理だって」

「だが、身分証を失った者はどれ以下だぞ。この国では人間扱いすら」

「奴隷が人間扱いされていたとでも？」

アルの視線がカイルを射竦める。殺気にも似た何かがこぼれる。

カイルのたじろいだ様子を見て、あるもまた少し冷静になった。

「ふう、すまん。だから奴隷じゃだめ。僕じゃあ不可能だったんだ。生まれた瞬間から、歯医者であることを宿命付けられている。それが奴隷だ」

ファヴェーラに髪を切りそろえてもらったアルは、すでに完全な別人となっていた。いや、本来の姿に戻っていたのだ。

「この国じゃ無理、それが意味することは？」

「……！？国を出るのか？」

カイルはようやく思い至る。この国では、奴隷が這い上がることは許されない。

しかし、他国なら、法制度の異なる国家にいけば、這い上がることも可能。

「半分正解。まあ出るのは事実だ。極秘に、誰にもばれぬように」

だが、ここで問題が生まれる。密入国と同じように、身分証を持たぬものが密出国することも、この国では禁じられている。そもそも身分証を持たぬ者の存在を許していないのだ。

身分証を破いたアルが出国すること、それがすでに難問である。

「おいおい。とぼけるなよカイル。ファヴェーラはどうして此処にいる？ファヴェーラの両親は、どこからやってきた？」

カイルは「なるほどなあ」と頭を掻いた。ファヴェーラは身分証を持っていない。そして両親は、この国に密入国していた。つまり逆をたどれば――

「この国から出ることはできる。でもルートが大変」

ファヴェーラが用意していたこの国の地図、それを広げる。それは、この王都の下水路の地図。カイルはそれを見て大きくため息をついた。

「アル、これは無理だ。下水路は糞尿にみちみちているし、これをこの距離を、国の外まで掻き分けて進むのは正気の沙汰じゃない」

アルはカイルの言葉を聞いて苦笑する。

「カーイル、間違えるなよ。どれだけ不快であっても、どれほど苦難に満ち満ちていても、不可能でない限り無理じゃないんだよ。糞尿がどうした？なんならそれをすすってやろうか？それで上に行けるなら、どれだけでもすすってやる」

アルはとっくの昔に覚悟を完了していた。どんな手を使ってでも這い上がる。たかが糞尿、喰らうことすらいとわない。

「下水路は問題ない。一応最後に裂傷がないかどうかチェックするがな」

黴菌だらけの糞尿の海。そこをくぐって行こうと言うのだ。少しの裂傷からでも黴菌が入り込み、破傷風などの症状を引き起こす。

「わかった。だが国を出てどうする？他国で名をあげるにしても――」

「そこも間違っているぞかいる。俺はこの国で這い上がるんだ。他国で証明しても意味ないだろう？俺はこの国で、俺が上に行くために国を出るんだよ。一時的にな」

カイルは訝しげな表情。ファヴェーラも理解できない。それを見てアルはくすくすと笑った。二人を背に手を大きく広げる。

「まあ見てろ。俺は奇跡を待たない。俺自身がもぎ取ってみせる」

アルの表情は二人から見えない。

「次この国に俺が入ったとき、それが新たな『俺』の始まりだ！」

五年伏した、今が始まりの時。復讐鬼が動き出す。

「あ、そうだ。ファヴェーラ。頼んでおいた手紙、渡してくれたか？」

ぽんと手を打つアル。ファヴェーラの方に振り返る。

「うん。でも、なんで『あそこ』に？」

カイルはぽかんとする。ファヴェーラへの頼みごと、いくつかのそれをカイルは知らないのだ。知っていたら、止めていたかもしれない。

「だって、俺は真でなきゃいけないだろ？記録からも、記憶からも、さ」

くすくす微笑むアル。

「だから、しょうがないよねえ」

この時の笑みの意味、それをカイルが知るのはすべてが終わった後。止める間もなく、止める隙きも与えず、アルは我が道を行くのだ。

アルがこの国を出るために下水に入った夜、同時王都から一軒の輸入本屋が消えた。親しみやすく王都の知識人から愛された店であったが、最後は炎にくるまれた。乾いた羊皮紙が燃える。本はよく燃えるのだ。

不幸は重なるもの。店主の比の不始末。不幸にも店主、夫人、そして『手伝い』の三人が焼死。この一件はそう片付けられた。そして一件の本屋など多くは忘れ去り、記憶は風化していく。

この三人の存在はこの国から抹消されたのだ。記憶からも、記録からも。

この件の真実は、闇の中である。

「ぶはっ、まったく、威勢よく言ったは良いが、気分のいいもんじゃないな」

糞尿の海を越え、王都を脱出したアル。王都からほどよく離れた森まで進み、泉を発見。ようやく身体と衣類を洗うことが出来た。未だに鼻が麻痺しているのは身体の防衛機能か。

「二度と下水など通るか畜生」

悪態を就かねばやってられないほど異臭にまみれていた下水。どれだけ洗っても臭いが堕ちるきがしない。実際衣服はもう捨て置いた方が良いレベルである。

「さて、とりあえず行商から服を買って、それからっと」

張り巡らせていた施行。ただこの先はそこまで細かく煮詰めていない。不確定要素が大きく、初めて出た王都の外側ということもあり、煮詰めるだけ無駄だという考えに至った。

「生きるための基礎力はつけた。アドリブでもうまくやるさ」

何がための五年間か。出来うる限りの準備はした。あとは為すだけ。

「さあねえさん。俺たちの旅の始まりだ」

アルハ泉から上がって、用意していたたび旅装束に着替えた。だが――「く、くさいな」

やはり二度と下水など通らないと、アルは心に決めた。